

令和六年度

滝川第二中学校 入学考査 問題

A1日程

国語

(五十分・百五十点)

注意事項

- 1 問題は1ページから16ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内わくないに記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督かんとくの先生の指示に従いなさい。

受験番号				氏名	
		—			

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号ふごうもそれぞれ一字としてふくみます。)

現在ぼくは、音楽を職業としています。でも、どうしてそうなったのか、自分でもよくわからない。音楽家になろうと思って①なったわけではないし、そもそも、ぼくは子どものころから、何かになるとか、何かになろうとするとか、そういうことをとても不思議に感じていました。

小学校で「将来何になりたいですか。みなさん書いてください」と言われたことがあります。ぼくは、何を書いたらいいのかわからなかった。まわりの子たちは、「総理大臣」とか「お医者さん」とか、女の子なら「※ スチュワーデス」「お嫁さん」とか、そういうことを書いている。よく考えたのだけれど、ぼくは「ない」と書きました。自分が何かになるということが想像できなかつたし、職業に就くということも、なんだか不思議なことに思えた。そういう感覚は、今でも残っているかもしれない。※ ニヒリスティックに「俺おれは何にもなりたくないんだ」と思っていたわけではないんです。たとえば昆虫こんちゅうなら、卵から幼虫になり、やがてさなぎになって、成虫になりますよね。時が経てば変

化する。でも、自分がそんなふうに変化していくというのが、ぼくにはどうもうまく想像できなかった。だから、10年後、20年後にはこうなっているはずだ、こうなっていよう、というような考え方もできなかった。

(A)、時間の感覚が欠落していたということなのかな、と今にしてみれば思います。時間の経過についてうまく語る事ができない、将来の自分が思い浮かばない。現在のぼくが感じている「なぜこんな生を送っているんだろう」という疑問も、その続きなのかもしれない。

音楽というのは「時間芸術」だといわれています。※ リニアな時間の中で、何か変化を起こしていくという創作活動、であるらしい。そういう意味では、ぼくはそもそも音楽を作るのが得意じゃないのかも知れない。でも、そういうのは学習すれば習得できることです。人為的・作為的じんいてきなものは、ルールを学べばできるようになる。

ルールを覚えて、そのルールどおりにものごとを並べる。たぶん一般的に、成長するというのは、それができるようになること※ なんだらうと思います。でもぼくの場合、それに対する齟齬そごが、いつもいつもあった。学習すればやれるようにはなるけれ

ど、何かちょっと生理的に、<sup>②</sup>そういうことがぼくには合わない  
ようです。

(中略) 過去から現在までの自分について、整理して話してみ  
る、というようなことには、ですから本当はちよつと違和感があ  
る。でも、今回はあえてやってみることにします。これまでの時  
間を<sup>※</sup>俯瞰して、過去から現在までの記憶とできごとを、順番に  
並べてつなげてみる。そうすることで初めて、現在のぼくについ  
ても見えてくるものがあると思うし、そういう語り方によって初  
めて、何かをほかの人と共有することができるとも思えない。そ  
う思つて。

ぼくは、世田谷にある「自由学園」系の幼稚園に通つていまし  
た。この幼稚園で初めて、ピアノを弾いたんです。

当時は白金に住んでいて、バスと電車を乗り継いで、ひとり  
幼稚園まで通つていました。幼稚園児が都心を横切つてひとり  
通園するなんて、きつと今ではかなり珍しいことですよ。で  
も当時は( I ) だつたと思います。そういう時代でした。

渋谷で乗り換えるときに、映画館に行ったりしていた。最近ま  
でプラネタリウムのあつた東急文化会館、あそこの地下で10円の  
ニュース映画が観られたんです。幼稚園の帰りに、友だちを誘つ

て観に行つたら見つかつちやつて、大問題になつた。「坂本くん  
という悪いことをした子がいますが、みなさんはそういうことを  
しないように」とか言われていたようで、幼稚園では悪い子の代  
表になつてしまいました。

それはともかく、幼稚園でピアノの時間というのがあつたんで  
す。毎週のように。みんな順番に、ピアノを弾かなくてはいけな  
い。ぼくが初めてピアノに触れたのはそのときです。3歳か4歳  
でした。楽しいという感じはぜんぜんしなかつたし、どんな曲を  
弾いたのかも覚えていない。

ピアノを弾いたこと以上に、幼稚園のことで強烈に覚えてい  
ることがあります。5歳ぐらいのころだつたと思いますが、園舎  
の窓ガラスに、水彩で絵を描きなさいと言われたんです。

透き通つたきれいなガラス窓に色を塗るといふのは、それを割  
るのに等しいぐらいのことに思えました。「そんなこととしていい  
の？」と思うけれど、先生たちがやれと言っている。心配でおろ  
おろする一方で、描いてみると、日の光が当たつて、すごくきれ  
いでもある。タブーを破ることへの不安と、それをやってみるこ  
との快感の両方があつた。

ガラスに絵を描くこと自体への後ろめたさと同時に、自分たち

が描いてしまったら、あとから入ってくる園児たちはどうするんだろう、もう描くスペースがなくなってしまうんじゃないか、と、次の世代のことがすごく心配になったことも記憶に残っています。

(中略)

幼稚園のときの体験でもう一つ、とても印象に残っているのは、夏休みにウサギの世話をさせられたことです。この週はナントカさんの家、次の週は坂本さんの家、というふうに割り当てがあって、ウサギが回ってくる。家に生き物がやってくるというのは、子どもにとっては一大事です。毎日、一生懸命、葉っぱをやったりしたのを覚えています。

(B) 9月、新学期になって幼稚園に行ったら「動物の世話をしてみようでしたか。そのときの気持ちを、歌にしてください」と先生に言われました。曲を作れというんです。

歌詞もメロディーも、自分で作らなければいけない。まず詞を書きます。ウサちゃんの目は赤い、とか、すごく(Ⅱ)を書いて、それにメロディーをつけました。たぶん、母親に手伝ってもらって、楽譜を書いて幼稚園に提出したのだと思います。歌って録音したものが、※ソノシートになっていたはずなんです。今では見あたりません。初めての作曲。4、5歳のときです。

③これは、強烈な体験でした。ウサギを飼ったこと自体も強く印象に残っているけれど、それを歌にしたことは、もっと強烈だった。なんだか、変なことをさせられちゃった、という感覚がありました。

くすぐったいようなうれしさ。他の誰のものとも違う、自分だけのものを得たという感覚。そんなものを感じたように思います。それと同時に、違和感もありました。ウサギという物体と、ぼくがつけた曲は、本来なんの関係もないのに、結びついてしまった。まさにそのウサギがいなければ、その音楽は生まれなかったわけですが、でも実際に手を噛まれたり、ウンコの世話をしたり、そういうふうにはぼくが触れたウサギとはまったく違うものが生まれている。

もちろん、当時のぼくはそんなふうに(Ⅲ)に考えることはできなかつたけれど、そこには、たしかに④齟齬なり違和感なりがありました。幼稚園児なりに、そういうものを感じていた。それは、けっこう根本的なことだと思えます。

(C)、今(2006年)※レバノンで戦争をしています。が、戦争で肉親が死んだとします。あるレバノン人の青年が、イスラエルの空爆で愛する妹を失ってしまう。そしてその青年が、

悲痛な思いを、音楽にする。でもそれは、彼が音楽にしている時点で、どうしても音楽の世界のようになってしまつて、<sup>⑤</sup> 妹の死そのものからは遠ざかつていく。

きっと文章でもそうでしょう。何かを文章にする時点で、文章としての良さ、文章としての美しさ、文章としての力、そういう、文章の世界に入つていかざるを得ない。音楽もそれと同じで、妹の死に本当に悲痛な思いを持つているにもかかわらず、音楽を作つてゐる限りにおいては、音楽という世界の問題に入つていつてしまふ。それは、現実の妹の死というものとは全然違うレベルのことで、そこには乗り越えられない距離がある。

ただその一方で、ある青年の妹の死というのは、その青年の記憶がなくなつてしまえば歴史の闇に葬られて消えてしまいかねないけれど、歌になることで、民族や世代の共有物として残つていく可能性ががあります。個的な体験から剥離すること、音楽という世界の実存を得ることで、時間や場所の枠を超えて共有されていく、そういう力を持ちうる。

表現というのは結局、他者が理解できる形、他者と共有できるような形でないと成立しないものです。だからどうしても、抽象化<sup>しやうか</sup>といふか、共同化<sup>きゆうか</sup>といふか、<sup>⑥</sup> そういう過程が必要になる。

すると、個的な体験、痛みや喜びは抜け落ちていかざるを得ない。そこには絶対的な限界があり、どうにもならない欠損感がある。でも、そういう限界と引き換えに、まったく別の国、別の世界の人が一緒に同じように理解できる何かへの通路ができる。<sup>⑦</sup> 言語も、音楽も、文化も、そういうものなんじゃないかと思ひます。

(坂本龍一「音楽は自由にする」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。)

注 スチュワードレス：女性のキャビンアテンダントに対する古い呼び方のこと。

ニヒリスティック：すべてをむなしく無価値と考えること。

リニア：直線的なこと、物事が一直線に進行する様子。

齟齬：くい違い。

俯瞰：高いところから下を見下ろすように広い視野で全体を把握すること。

ソノシート：薄い塩化ビニールなどで作られた、音楽を記録するもの。

レバノンで戦争：二〇〇六年七月、レバノンのシリア派武装組織ヒズボラがイスラエル兵を拉致したことをきっかけに、イスラエルがレバノンを空爆、紛争はレバノン全

土に拡大した。

剝離：はがれること、はがすこと。

問一 (A) (C) に入ることばとして適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。(同じものは二度選べません。)

- ア として      イ しかし      ウ つまり  
エ また      オ たとえば

問二 ——線部①「そもそも、ぼくは子どものころから、何かになるとか、何かになろうとするとか、そういうことをとても不思議に感じていました」とありますが、大人の「ぼく」は、そのことをどのようにとらえていますか。これについて説明した次の文の【 】に入ることばを、本文中から十二字で書きぬきなさい。

【 】のではないかと思っている。

問三 ——線部②「そういうこと」は何を指していますか。その内容として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽を創作すること  
イ 自己を成長させようとする事  
ウ ルールにそつてものごつを行うこと  
エ ルールを学習し、覚えること

問四 (I) (II) に共通して入ることばとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 詩的なこと      イ 普通ふつうのこと  
ウ 立派なこと      エ 不思議なこと

問五 —— 線部③ 「これは、強烈な体験でした」とありますが、

どのような点が強烈だったのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分には音楽の才能がひそんでいるのかもしれないと感じられた点。

イ 自分独自の作品を手に入れることができたという感覚を味わえた点。

ウ ウサギの世話に一生懸命取り組んで、やり通した達成感を得られた点。

エ ウサギの世話をすることで、音楽を生み出すことができたと感じられた点。

オ 実際に世話をしたウサギとはまったく異なるものが生まれたと感じた点。

カ 自分の感じた違和感こそが音楽をつくりだす根本にあると知った点。

問六 (Ⅲ) に入ることで最も適当なものを、次のア

～エから選び、記号で答えなさい。

ア 客観的    イ 感覚的    ウ 一般的    エ 経験的

問七 —— 線部④ 「齟齬なり違和感なり」とありますが、どうい

うことですか。これについて説明した次の文の【    】に入ることを、本文中からそれぞれ十字以上十二字以内で書きぬきなさい。

現実の出来事と音楽の間には【ア】があつて、【イ】を味わわざるを得ないということ。

問八 —— 線部⑤ 「妹の死そのもの」とありますが、これを別の

表現で表したものとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 歴史の闇    イ 民族や世代の共有物  
ウ 個的な体験    エ 音楽という世界の実存

問九 ——線部⑥「そういう過程」とはどのようなことですか。

その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 世界の人々と共有するために、時間や場所を明確にしな  
い作品を作ること。

イ 人々と作品を共有するために、受け取り手に痛みや喜び  
が発生しない内容にすること。

ウ 他者と共有するために、個別の要素をそぎ落とし、広く  
あてはまる内容にすること。

エ 世界の人々と共有するために、言語化せずに音楽で伝え  
る工夫くふうをすること。

問十 ——線部⑦「言語も、音楽も、文化も、そういうものなん

じゃないかと思えます」とはどういうことですか。これにつ  
いて説明した次の文の【 】に入ることを、【ア】  
は七字、【イ】は二字、【ウ】は三字、【エ】は  
四字で本文中から書きぬきなさい。

【ア】を超えて【イ】されることで、【ウ】、

【エ】の人であつても、表現の絶対的な限界と引き換え  
に同じように理解されるようになるものであるということ。



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。)

「バイクに乗って旅に出た七十四歳の山野イコは、母親の故郷で、ふーちゃんという十二歳の少女のゆうれいに出会った。」

「ふーちゃんは どうして ゆうれい になったのかしらね」

「ま、死んだからでしょ」

けろっとした答えがかえってきた。

「そうじゃなくって、四十九日過ぎてても、ずっとゆうれいそのままなんでしょ。(中略) 私もゆうれいに会うのはじめて。私みたいに長く生きてれば、今までに一度ぐらいは出会っても良さそうなのに」

「そうよね、ふしぎよねえ。ゆうれいって……若くて死んじゃった人になることがおもしろい。そういう人はこの世に心残りがいっぱいあるからね。それが消えないでいる人は、居残りしてもいいらしいの。あたしみたいにはーっとしたゆうれいには助かるわ。でもいくら心残りでも恨みはだめなのよ。そういう人はゆうれいって呼ばないの」

「じゃ、なんて呼ぶの？」

「知らない。怖い話にでてくる怨霊おんりょうって言うんじゃないの。お、やだ。あたしは、そんなゆうれいじゃないからね。安心して。でも、自分の心残りを忘れちゃうって言うのも、ひどい話だけど……」

ふーちゃんは申し訳なさそうに、(A)をすぼめた。

「だけど、年取って死んだひとでも、心残りがあるかもしれないでしょ」

ふーちゃんは上目づかいに、どこかを見ながら、口を開いた。「そういうひとも、少しはいるかもしれないけどね。『しょうがない、これでいいことにしよう。長生きさせてもらったんだから、運命ってこういうものだ』、って、思うんじゃないの。ゆうれいも欲張ったらきりないもの」

ふーちゃんは急にわかったふうな表情をした。

「そうだとってもよ、死んだ人はたくさんいるんだから、ゆうれいって、うじゃうじゃいるはずじゃない？」

「イコちゃん、うじゃうじゃとは、ひどいよ。ミミズじゃないんだから」

「だって……<sup>①</sup> そんな話、この年になるまで聞いたこともないか

ら」

「みんなは知らないのよ。うれしいっていう名前は知っていても、出会うことはまずないからね。出会っても、簡単に忘れてしまわらしいの。うれしいってさ、遠慮がちでさ、引きこもりでさ、自分からは動くのいやなのよ。存在がはっきりしないからね、どうも自信がなくなつてね。哀しい存在なのよ。今日みたいな、出会うなんて、すごいあり得ない。でもすごいうれしい。『ラッキーチャチャチャ』だね」

ふーちゃんは子どもっぽく、体をびびりと動かした。

なんで、こんな今風の言葉を知っているんだろ……、ヒキコモリとか……ラッキーチャチャチャとか……。

うれしいって、柳の下あたりに、陰気にさまよっているものじゃないの？

「うれしいは、うらめしやううって叫んで、出てくるってきいたけど」

私はよく絵にあるように、両手をだらんとさせ、振ってみせた。「かっこわるー！」

ふーちゃんは今どきの女の子みたいに生意気につぶやいた。

「でも、やっぱりふしぎ。イコちゃんにあたしが見えたなんて

さ。うれしいけど、どうしてだろうね。あつ、もしかしたらあの赤いバイクのせいじゃない？ あれ、どこか、昆虫ににてるもん。昆虫はね、生きる時間が短いから、心残りのかたまりでしょ。だから元気なうちはやたら走り回りたいんじゃないの。あせってるんだ」

② それって私のこと言ってるみたいだ。

「すごいなあ、走るのって、気持ちいいだろうなあ。ブアンブアンブアンって、速いのだーいすき」

ふーちゃんはほつぺたをふくらませて、音を出してる。目が輝いて興奮してる。③ へんなうれしい。

「ところでふーちゃんの心残りって、いったいなんなんだろうねえ」

④ 私はしらばっくれて、またしても聞かずにはいられない。

「ずっとかんがえてはいるんだけど……それが、ぼーんやりとしているのよ。でもね、ここ、胸の中にあたしの心残り、確かにぶらさがってる。重たいのよ。あきらめればいいんだけど、それができないのよ。早くかるくなりたいよ。でもどうしたらいいんだろ。あたし、十二だから……おかあちゃんやおとうちゃんの、ことばぐらいしか、記憶にないのよ。思い出がないっていうのは、

力がないってことだわねえ。おかあちゃんのこととは、とつてもなつかしいけど、これは心残りとはちがうような気がするの。心残りって、もっとちゃんとしたことだと思う。あたしって、ほんとうにしようがないやつ……」

ふーちゃんは大きな溜息をついた。

「あたしね、窓からぼーっと外ばかり見てるって、おかあちゃんにいつも文句言われてた。でもぼーっとしてたんじゃなのよ。どこかに行きたいと思ってたの。だって川は毎日、毎日、止まらないで流れていくんだもの。あんなふうはどこか遠い所に行ってみたかった。冒険してみたかった。これが心残りなのかなあ……そうだとしたら自分のことじゃない？ ずいぶんわがままな心残りだね」

⑤ ふーちゃんは探るように、手で自分の胸のあたりをなぜている。言いかたがなんともあいらしい。

でも、「どこかに行ってみたかった」という言葉はずんと私の胸にも響いてきた。きつとどこにも行かれないんだ、でも、死んだ時は、この地を離れて東京にいたはず。私はそこで生まれているのだから。

ふーちゃんは目を引っくりかえるように上にむけて、なにかを

考えている様子をしながら、続けて言った。

「あたし、東京に行くはずだったの。高等小学校卒業したらね。あれ、もしかしたら、行ったのかもしれない。だって、本郷って町の名前おぼえているのよ。それって東京の町でしょ。そこに坂があつた……。知り合いのおねえちゃんがお嫁に行った家に、いさせてもらったのかなあ……。そこから学校に行くはずだったの。やっぱり……行つたのかなあ……。その学校ね、絵の学校。あたし、絵描きになりたかつたの。ううん、なるはずだったのよ……どうしてこんなこと急におもいだしたんだろう」

私はさつき見た、壁に貼ってあつた子どもの絵を思い出した。すすによごれて、かろうじて色のついているのが見えたけど。

「ああ、わかつた。下の壁に貼ってあつた絵、ふーちゃんが小さい時、描いたのね」

【 I 】

【 II 】

私は廊下のむこうに首を向けた。

【 III 】

ふーちゃんは鼻にしわを寄せ、自信ありげにふんと小さく息をつく。

【 IV 】

【 V 】

ふーちゃんは、何にもないって言うように両手をひろげてみせる。

私はふーちゃんの細い腕をつかんで、「しっかりと思い出しなさいよ！」とゆすりたくなった。

私にしてみれば、ここで、「実は、残してきた娘たちが心残り  
で、成仏できなかったのよ」とドラマチックに打ち明けてもらいたかった。「うらめしや〜」と形だけでも、未練たらたらに。じぶじぶと涙ぐらい見せて欲しかった。それが、まあ、※ コオロギの兵隊と言ってみたり、赤いバイクにはしゃいでみたりして。

⑥ あいにくお天気まで晴天、夏の初めのきれいな空色をしている。なんだか訳もなく私は不満になっていた。

目をあげると、ふーちゃんは、首をまげて、笑ってる。その頓着ない顔を見て、はっと気がついた。もしかすると、ゆうれいって、出会った人の記憶にある姿で現れるのではないか……。私には写真のなかの十二歳のハハオヤの記憶しかないから、こういうことになってしまったのかもしれない。とすると、言い換えれば、ここにいるのは十二歳までの記憶しかないふーちゃんなの

だ。まだ自分のむすめ、つまり（B）と出会うはるか前のふーちゃんということになる。

私は一歩乗り出した。あの写真を見せればすべて解決する。

⑦ でも私は動きを止めふーちゃんを見るだけにした。もしそんなことをしたら、とたんにすべてが終わってしまいそうな気がする。心残りの元がこんなおばあさんまで生きて、おまけにまだおてんばやってるなんて知ったら、安心して、さっさとむこうの世界に行ってしまうかもしれない。そこで総て終わりだ。私はもう少しこの可愛い女の子のそばにくっついていたかった。

（角野栄子「ラストラン」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注 コオロギの兵隊：「私」の着ているライダースーツ（バイクに乗る時の服）をふーちゃんが最初に見たときに言ったことば。

問一（A）に入る体の一部を表すことばとして最も適当な

ものを、次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア 目    イ 耳    ウ 鼻    エ 顎    オ 肩

問二 —— 線部①「そんな話」とはどのようなことを指している

すか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 若くして死んだ人はこの世に心残りがあるので、ゆうれいか怨霊になること。

イ 若くして死に、この世に心残りのある人がゆうれいになることがおおいこと。

ウ 年を取って死んだら、ゆうれいにはなれず、怨霊になる可能性が高いということ。

エ 死んだ人はたくさんいるため、ゆうれいもうじゃうじゃいるはずだということ。

問三 —— 線部②「それって私のこと言ってるみたいだ」とあり

ますが、「私」は昆虫のどのようなところが、自分と似ていると考えているのですか。本文中のことばを使って、三十五字以内で書きなさい。

問四 —— 線部③「へんなゆうれい」とありますが、どんなところが

へんなのですか。これについて説明した次の文の【 】に入ることを、本文中のことばを使って、それぞれ十五字以内で書きなさい。

ゆうれいは【ア】ものだという、ゆうれいに対する「私」のイメージと異なつて、ふうちゃんが【イ】性格であるところ。

問五 —— 線部④「私はしらばっくれて、またしても聞かすには

いられない」とありますが、なぜですか。「私」がそう思っている理由としてふさわしい部分を、「くから。」につながるように、本文中から五十字以内で探し、それぞれ最初と最後の五字を書きぬきなさい。

【 】から。

問六 ——線部⑤「ふーちゃんは探るように、手で自分の胸のあたりをなぞっている」とありますが、このときのふーちゃんの気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア ゆうれいである自分がこの世にとどまっているのは、遠くへ行きたかったとか、冒険がしてみたかったという後悔があるかもしれないからだと思いつき、何をしようか考えている。

イ ゆうれいである自分がこの世にとどまっているのは、何らかの心残りがあるからだ、ほんやり理解してはいるが、それが何なのかはつきりわからず、じれったく思っている。

ウ ゆうれいである自分がこの世にとどまっているのは、あまりにもほんやりした性格の自分には、何が心残りなのかはわからないためかもしれないと気づいて、がっかりしている。

エ ゆうれいである自分がこの世にとどまっているのは、何かしらの心残りがあるせいだと気づき、なんとしてでもそれを見つけてやろうと、決意を新たにしている。

問七 「Ⅰ」～「Ⅴ」に入る会話文として適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「カレンダーのところの」

イ 「じゃ、ふーちゃんの絵はどこにあるの？」

ウ 「どれ？」

エ 「あれ、あれは、ちがう。あんな下手じゃなかった」

オ 「もう、ないと思う。どこにもないと思う。そんな気がする」

問八 ——線部⑥「あいにくお天気まで晴天」とありますが、「晴天」なのに「あいにく」ということばを使ったのはなぜですか。これについて説明した次の文の「Ⅰ」に入ることばを、「ア」は七字、「イ」は一字、「ウ」は八字で、本文中から書きぬきなさい。

この世に心残りがあつてゆうれいになったのだから、未練がましく「ア」と言って、「イ」を見せて欲しいのに、ふーちゃんがおもしろいことを言ったり、「ウ」しているのが不満だったから。

問九 ( B ) に入る漢字一字のことばを、本文中から書きぬきなさい。

問十 —— 線部⑦「でも私は動きを止めふーちゃんを見るだけにした」とありますが、このような行動をとったのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の正体を明かして、ふーちゃんの心残りのもとがおてんばなおばあさんと知ったら、ふーちゃんがかっかりしてしまうと心配したから。

イ ゆうれいは出会う人の記憶の中に残った姿でしか現れないということがわかり、ふーちゃんに対する疑問が解消して、すっきりとしたから。

ウ 笑顔<sup>えがお</sup>を見せるふーちゃんを見ると、不満よりいとしさの方が大きくなり、自分の正体を明かして悲しませることとは、かわいそうだと思ったから。

エ 笑顔を見せるふーちゃんを見てみると、心残りのもとを解明したい気持ちより、このまま一緒に時間を過ごしたいという気持ちのほうが強くなったから。

三 次のことばの□には、それぞれ数字が入ります。例にならつて、数字の合計を算用数字で答えなさい。

例  
 ・ □石 □鳥 …… 一・二  
 ・ 仏の顔も □度まで …… 三  
 (答) 6

(1) ・ 瓜<sup>うり</sup> □つ  
 ・ □言居士<sup>こじ</sup>  
 (2) ・ 石の上にも □年  
 ・ □面楚歌<sup>そか</sup>

(3) ・ □を聞いて □を知る  
 ・ 朝 □暮<sup>ぼ</sup> □

(4) ・ □兎<sup>と</sup>を追うものは □兎をも得ず  
 ・ 朝 □夕<sup>せき</sup> □

(5) ・ □つ子の魂<sup>たましい</sup> □まで  
 ・ □里霧中<sup>む</sup>

四 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の——線部の語と同じ種類の敬語になっているものを、それぞれ後のア～エから選び、記号で答えなさい。

① 私が先生のところに伺<sup>うかが</sup>います。

ア 先生のお便りを、拝見<sup>はいけん</sup>しました。

イ 兄は、明日合宿から帰<sup>かえ</sup>ってきました。

ウ 書類を<sup>しるひ</sup>ご覧ください。

エ あなたのおっしやることはもつともです。

② 校長先生が、大会の結果をほめてくださつた。

ア 家族は留守にしています。

イ 先生にお礼を申し上げました。

ウ 貴重なご意見を<sup>うけたまわ</sup>承<sup>うけたまわ</sup>りました。

エ どうぞ召<sup>め</sup>し上が<sup>あが</sup>ってください。

③ 妹は小学生です。

ア あなたのご両親<sup>ごりやうしん</sup>ですね。

イ 先生のお話を聞<sup>き</sup>きました。

ウ 私の名前を<sup>なまえ</sup>ご存<sup>ぞん</sup>じでしようか。

エ 私は田中と申<sup>まを</sup>します。

(2) 正しい敬語を使用したとき、次の①・②に続く文を、それぞれ

後のア～エから選び、記号で答えなさい。

① 父が、「これを先生に（ ）  
て手紙を持たせた。 ( ) と言っ

ア 見てもらってください。

イ 見ていただいきなさい。

ウ 見ていただきなさってください。

エ 見ていただいていらっしゃい。

② 「ぜひ私の家に（ ） ( )

ア 参<sup>まゐ</sup>ってください。

イ おいでください。

ウ おいでになっていただいでください。

エ おいでになられてください。



五 次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- (1) 旅行先で迷子になり、困惑する。
- (2) 人間は、自然の恩恵にあずかっている。
- (3) 王様に忠誠をちかう。
- (4) 小春日和の昼下がりを、のんびりと過ごす。
- (5) 悲しい思い出が、脳裏から離れない。
- (6) ニワシが花の手入れをする。
- (7) 集団行動では、キリツを守ることが大切だ。
- (8) 地下シゲンが豊かにある。
- (9) ゾウキ移植を行う。
- (10) 病気が治ってタイインする。





